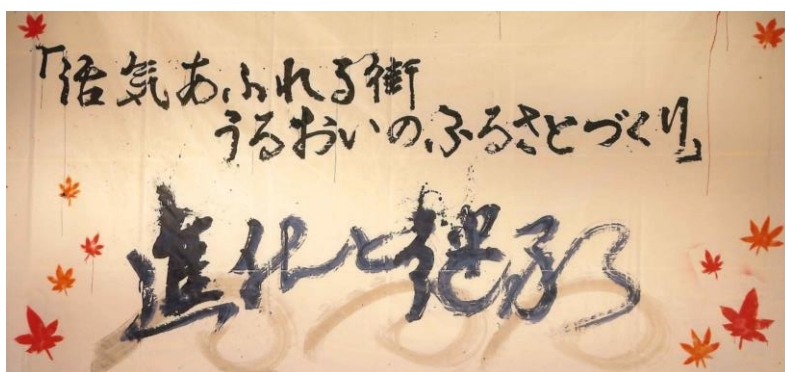


KATSUYAMA

真庭市勝山地域振興計画 ～観光地域づくりに向けて～

Maniwa City



2021 ふるさと勝山もみじまつり
勝山高校書道部作

2021（令和3）年3月
真庭市勝山振興局

目次

1. 計画の目的	1
2. 勝山地域の概要	2
3. 勝山の現状と課題	4
4. 目指す方向性と取組	5
5. 市内他地域とのつながり	8

1. 計画の目的

平成 27 年に策定した『第 2 次真庭市総合計画』は、「まち」にある先人から引き継いだたくさんの「価値」、すなわち人や文化、歴史、風土、習慣、もの、自然、環境などを活かしながら、真庭市に暮らす「ひと」が誇りをもち、互いを尊重しながら暮らしていく「真庭ライフスタイル」（多彩な真庭の豊かな生活）の実現を目標としている。そして、この具体的な施策として、観光については「農畜産物や景観、文化、伝統などの地域資源を組み合わせた新しい観光の取組を支援し、『回る経済』の中の産業として強化」とされており、令和 2 年 12 月の改訂においても、その理念は引き継がれる。

また、平成 29 年に策定した『真庭市観光戦略』においては、地域づくりの主体を真庭市民にとらえ、豊かさを自ら生み出して幸せに暮らす真庭市民の「日常」＝旅行者にとっての「異日常」を提供する「住んでよし、訪れてよし」の観光地域づくりを観光振興の柱として設定した。

さらに、一般社団法人真庭観光局が創設された平成 30 年 4 月に策定した『真庭市観光戦略アクションプラン』では、観光地域づくりを実践していくため、観光案内所の運営・整備と観光案内コンシェルジュの設置、滞在交流プログラムの企画・実施と滞在プログラム・ツアーの販売、二次交通の整備などのアクションプランを掲げている。

真庭市勝山地域振興計画（以下「本計画」という。）は、上位計画・指針との整合性を図りつつ、先に策定された『真庭市蒜山地域振興計画』における取組や経済効果との連動及び勝山地域における「観光地域づくり」のビジョンと、概ね 10 年先を見越した上で、今後 5 年間に実施する施策の計画をとりまとめたものである。

2. 勝山地域の概要

勝山地域に存在する地域資源を 5 つの資本の観点から分類してみた。

1) 人工資本

古くから出雲街道が通る交通の要衝として栄え、江戸時代には城下町を形成し、近現代においては真庭地域の行政機関の中心地として、岡山県美作県民局真庭地域事務所や真庭警察署、検察庁、簡易裁判所などの機関が点在している。また、古くから林業が栄え、製材所や木材市場、真庭森林組合や銘建工業、木材加工研究室、木材ふれあい会館など林業に関する施設も多い。

2) 文化・歴史資本

出雲街道、高瀬舟の発着場跡地、城下町由来の太鼓山・城山の遺構、白壁や格子窓の商家や民家、なまこ壁の土蔵といった伝統的な建物が並ぶ古い町並みなど、ノスタルジックを感じる趣ある町並みとなっている。寺院も多数存在し、円応禅師誕生井や「殺生石」と「玉藻前」ゆかりの「玉雲宮」をお祀りしてある化生寺、妙円寺、安養寺、大雲寺、明德寺、高田神社などがある。また、毎年 10 月 19 日、20 日に行われる勝山喧嘩だんじり。夜になると 9 台の喧嘩だんじりが激しくぶつかり合い、熱い雄叫びが城下町にこだまする。

また、勝山は「文化の香る」まちとしても、様々な取り組みを展開している。明治時代中期のしょうゆ蔵を「文化往来館ひしお」として改修し、ホール・中庭・ギャラリー・カフェからなる文化発信基地となっている。平成 30 年 7 月には、合併当時の真庭市本庁舎を「真庭市立中央図書館」としてリニューアルし、図書館機能だけでなく、映画祭やワークショップなどを企画し、市民の文化活動を後押ししている。

3) 自然資本

勝山には豊かな自然も残されている。春には、「岩井畝の大桜」「桜本寺の桜」「神代の四季桜」「三浦邸の桜」「深山桜」が咲き誇る。夏には、勝山の中央を貫き流れる清流旭川で鮎釣りに勤しむ人々の姿を多く見かける。梅雨時期には、三浦邸のあじさいが見頃を迎える。神代の深山桜の付近では、2.4ha もの広大な面積の畑に地元住民の手で植えられたひまわりが晴天に映え、その風景は圧巻である。標高 1,030m を誇る星山には登山客が多く訪れる。その登山口にあるビジターセンターは 2020 年に地滑り防止区域の地盤負荷を軽減するため解体されたが、バンガローやミニロッジ、テントサイトなどのキャンプ施設は残っており、コロナ禍におけるアウトドアブームの中、勝山の新たな魅力の一つになるであろう。秋、高さ 110m の中国地方随一のスケールを誇る名瀑「神庭の滝」では紅葉を眺める多くの観光客で賑わう。神代の「龍宮岩」付近の渓谷の紅葉も美しい風景を醸し出す。その沿線にある神代の四季桜も、紅葉の赤と桜のピンクが相まって見る人を惹きつける。

また、自然の恵みを生かした地域特産品も数多くある。勝山の地酒である辻本店の御前酒、勝山の竹細工、高田硯、勝山銀沫、とみはら茶、皇子こんにゃく、マツリカの石けん、クラフトビールなど。

4) 社会関係資本

勝山の町並みは平成の当初、観光客が歩く姿はほとんどなかった。まちなかの玄関先にのれんが掛かり、白壁やなまこ壁などの景観の修景が進み、電線の地中化とアスファルト舗装から景観に配慮した舗装へ整備し、町並みを散策する観光客の数が年々増えていくなかで、住民意識にも変化がみら

れるようになった。ひらひらと手招きするように揺れる勝山ののれんは、訪れる人とのコミュニケーションツールにもなっている。軒先に季節の山野草を飾ったり、古いものを美しくあつらえたり。ちょっとした心遣いをおもてなしの心として、町並みを訪れる人に楽しんでもらう。おもてなしの心が息づく町という側面も観光客を寄せ付ける大きな魅力の一つである。

5) 人的資本

昭和 60 年に岡山県から「町並み保存地区」の指定を受け、景観補修や観光施設の基盤整備などを進めていくなかで、徐々に観光客が増え始め、住民意識に変化がみられるようになり、地元住民で何かできることはないか、との思いで、平成 8 年町並みの地域住民有志による「町並み保存事業を応援する会」が設立された。観光客無料休憩所「頼山亭」をオープンさせ、のれんのまちの展開、のれんスタンプラリーなど各種イベントを推進した。

さらには、「勝山文化往来館・ひしお」が整備されたのを契機に、NPO 法人勝山・町並み委員会が設立、まちづくりや文化・芸術の推進が図られた。

現在では、世代交代を進めるべく、勝山・町並み会議や（一社）やまのふねなどができ、若い世代によるまちづくりが始まろうとしている。

3. 勝山の現状と課題

観光地域づくりの観点から、2018 年度真庭地域観光客満足度調査から勝山地域の結果を抜粋し、傾向を検証する。

①旅行の同行者 (％)

	子連れ家族	大人の家族	夫婦	カップル	友人	職場や団体	一人	その他
勝山	20.2	15.5	25.0	4.8	8.3	1.2	21.4	1.2
蒜山	44.9	6.3	15.7	9.1	14.6	0.8	3.5	2.0
湯原	30.8	8.8	30.8	8.4	10.0	0.4	9.2	0.8

市内のほかの観光地と比較し、子連れ家族のニーズより年齢層の高い家族と一人旅で訪れる傾向が高くなっていることがうかがえる。

②来訪回数 (％)

	初めて	2回目	3回目	4回目	5回目	6~9回目	10回以上	無回答
勝山	40.5	11.9	8.3	1.2	-	4.8	32.1	1.2
蒜山	19.7	10.6	9.8	6.7	7.9	7.9	33.5	3.9
湯原	46.4	16.4	5.2	6.4	2.4	6.4	14.4	2.4

初めてか10回以上の割合が高くなっており、10回以上の来訪はお雛まつりの影響があるかと考えたが、この調査時期がそれとは重なっていないため、昔ながらの勝山ファンが蒜山並に多いことがうかがえる。

③旅行日程 (％)

	日帰り(半日)	日帰り(1日)	1泊2日	2泊3日	3泊以上	無回答
勝山	38.1	15.5	26.2	2.4	2.4	15.5
蒜山	24.4	12.2	39.8	6.7	2.0	15.0
湯原	8.8	3.2	64.4	3.6	1.6	18.4

勝山には宿泊施設がなく、1泊2日のお客は他地域に流れていると考え、勝山は通過地点にしかなっていない可能性が高い。

④現地で情報収集する場所

	SNS	道の駅	宿泊場所	観光案内所	SA・PA	観光施設	駅	飲食店	スーパー
勝山	34.5	29.8	19.0	36.9	17.9	9.5	11.9	3.6	-
蒜山	40.9	39.0	23.2	13.0	20.9	12.6	2.8	3.1	0.4
湯原	37.6	25.6	41.2	19.2	18.0	13.2	2.0	1.6	0.4

中国美作勝山駅の観光案内所が多くなっている。別の調査項目では、真庭地域の来訪の交通手段は、圧倒的に自家用車となっている。情報収集の場としての観光案内所であることを踏まえ、町並み保存地区内への移転も視野に検討する必要がある。

[まとめ]

蒜山に多く、勝山には弱い「子連れの家族」層を誘客するための蒜山・湯原との連携が必要。

滞在時間の長時間化が必要。

一人旅や年齢層高めの来訪者が多いので、民宿とは趣向の異なるニッチな宿泊施設が必要。

4. 目指す方向性と取組

1) with コロナにおける神庭の滝の観光戦略

密にならない自然環境や遠距離でなく近距離で楽しめる場所を求めて、と観光の意識の変革が現れている。平成31年度と令和2年度の比較で、お盆時期は1.5倍、その他の月でも、1.1～1.2倍の入込客数となっている。神庭の滝はこれまで、勝山を代表する観光スポットであったが、観光客数は減少の一途を辿っている。これまで、真庭市の直営施設として管理運営してきたが、民間活力の導入へ舵をきり、神庭の滝の自然を活かした体験学習プログラムを導入し、新たな魅力の向上を図る。

2) 郷土資料館と武家屋敷の積極的活用に向けた用途変更

町並み保存地区の中央に位置している郷土資料館は、観光客と接するに絶好の位置にある。更に、観光客にとってオープンな場所となるようにしていく必要がある。勝山及び市内他地域の観光情報の集約、移住定住相談窓口、手仕事をもつ作家と町並みをつなぐ地域産業振興センターなど、観光から人繋ぎ、なりわい繋ぎとなるような多様な機能を集積した施設となるよう検討していきたい。

また、敷地内に旭川の見える木の公園を整備することで、観光客の滞在時間の長期化と子連れ家族層の誘客を図りたい。芝生化、植樹、本が読めるベンチ、気軽に旭川に降りることができる歩道の設置などが考えられる。観光駐車場については、城内、山本町、勝山文化センターの利用を促すことで、町並み保存地区を散策する観光客の安全性の向上を確保したい。

郷土資料館の民俗資料については、武家屋敷に移動し、昔の暮らしぶりや人々の思いに触れられる場所にしていくよう検討する。

3) 町並みの景観保全

真庭市景観条例に基づく真庭市景観計画により、町並み保存地区は勝山重点景観づくり地区に指定されている。目標としては、「地区の歴史的資産を生かしつつ伝統・文化を感じる質の高いまち並みの形成」としている。空き家が年々増え続けている中で、町並みの景観と国道側から見える伝統的石積み護岸をどのようにどこまで遺していくのか、歴史ある町並みの価値をどのようにあげていくのか、重要伝統的建造物群保存地区への指定も視野に、地域住民と議論を深めていく必要がある。

4) with コロナにおける町並み周遊散策の確立

町並み保存地区～旦～高田城本丸跡に至るまでの散策できるルートの活用促進を図るため、散策マップの充実、観光案内板の一新、Wi-Fi環境整備、観光情報サイトの充実などの対策を行い、勝山の滞在時間の長期化を図る。

5) 町並み以外の観光地域づくり

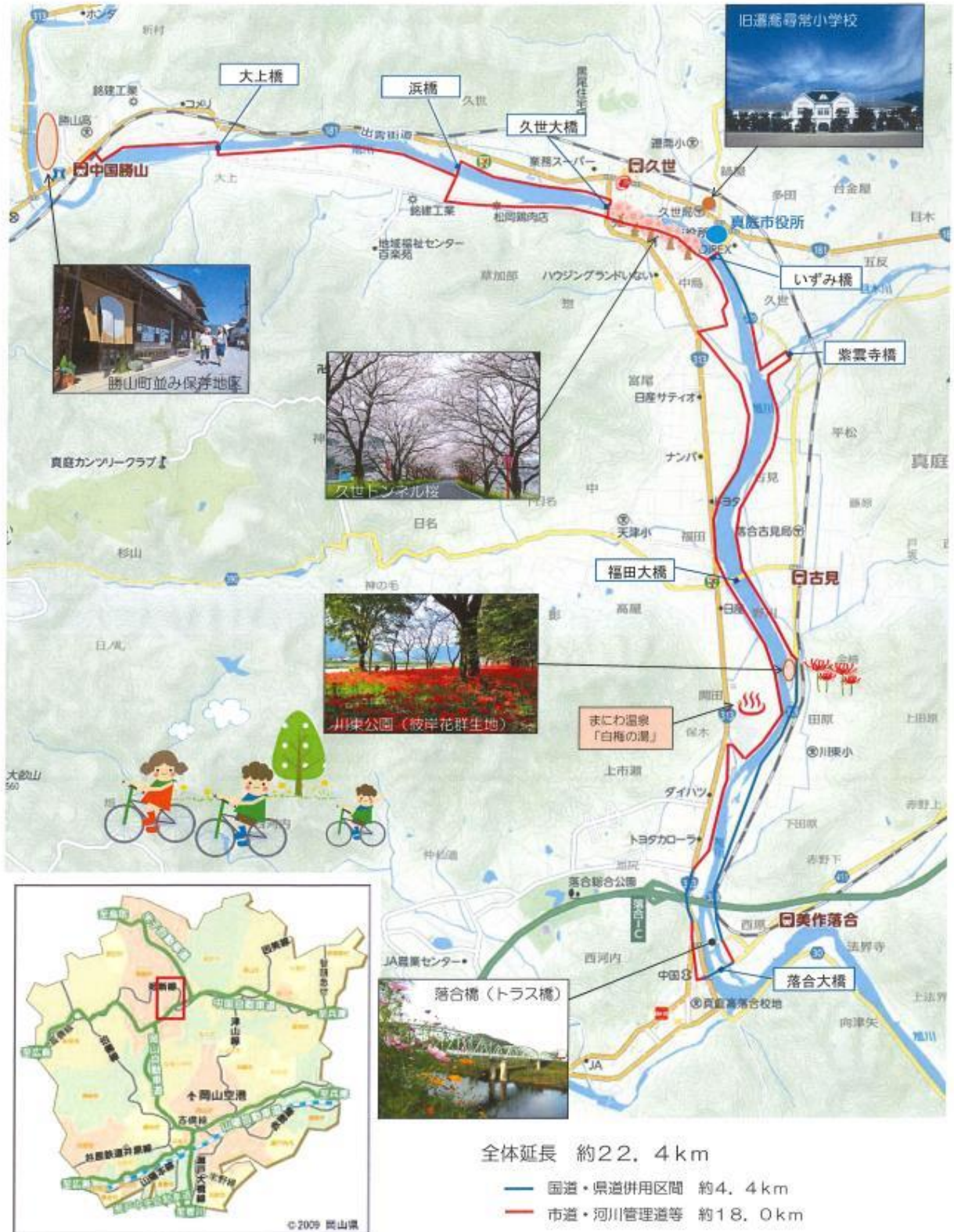
神代、城北、月田、富原など勝山にはそれぞれ自然豊かな地域がある。神代地区は、国道から見下ろす棚田景観と四季桜、龍宮岩、ロッククライミング場など秘境感満載である。農を基本とした6

次産業化と観光を掛け合わせた地域振興が考えられる。城北地区は、あいがも組合による有機水稲栽培やピオーネ栽培が盛んな地域である。三浦邸もこの地域の財産であるが、活用方法について検討を重ねていく必要がある。月田地区はコミュニティが強く、自治がしっかりした地域である。しかし、小学校の児童数は減少しており、地域住民も危機感を抱いている。Uターンを軸とした定住事業を展開していく必要がある。富原地区は、高齢化が深刻な問題となっているが、富原林業、とみはら茶、皇子こんにゃく、薬草など母体となる地場産業が盛んであり、世代交代を進めながら、農泊を基盤としたグリーンツーリズムや体験ワークショップなど、地域も楽しみながら活動ができるしくみづくりが必要である。

6) 情報発信と情報環境の強化

「勝山 観光」でサーチすると、岡山観光連盟がトップで表示される。より勝山の深い情報が得られる独自のプラットフォームが必要である。岡山県の補助事業で立ち上げた「山里手暮」というサイトを（一社）やまのふねが運営しており、現在はクラフトと舟宿の情報がメインとなっているが、1軒1軒のれんに込められたメッセージやストーリーを読むことができる情報を掲載準備中であり、今後勝山のコアな情報も掲載できるプラットフォームになることを期待したい。

旭川サイクリングロードでつながる勝山～久世～落合



5. 市内他地域とのつながり

1) 蒜山ミュージアムとのつながり

勝山は「文化の香るまち」として、町並み保全地区のノスタルジックな景観と文化振興の発信拠点となる「文化往来館ひしお」を運営してきた。また、平成 30 年にオープンした真庭市立中央図書館は、約 9 万点（令和 2 年度末時点）の蔵書数を誇る。それにあわせて本とまちプロジェクトとして、町並みのお店に本を揃え、気軽に読書できる環境も整えてきた。また、中央図書館では、月イチ映画祭、ドライブインシアターなど各種イベントも実施している。特に映画祭については、ポーランド映画やドイツ映画など質の高い映画を上映している。

一方、今後移築整備される蒜山ミュージアムは、真庭市の文化の発信拠点として重要な役割を担うことになるため、蒜山ミュージアムとひしお及び真庭市立中央図書館は連携を密にし、相互に相乗効果が得られるようしなければならない。

2) 湯原温泉とのつながり

勝山を訪れる観光客は日帰りが大半を占める。宿泊客の多い湯原温泉との連結は必要不可欠で、勝山に湯原の情報が、湯原にも勝山の情報が得られるようになっていく必要がある。勝山で散策や体験をした後に湯原で宿泊、翌日湯原の社で中世の神秘にふれるツアーなど、ここでしかできないことをメニュー化し、発信していかなければならない。双方には観光協会があるので、両者の連携を図りながら、お互いの魅力を相乗的に引き出せる工夫が必要である。